

Title	比較教育学研究序説(Abstract_要旨)
Author(s)	池田, 進
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1971-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/213601
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名	池 田 進 いけ だ すすむ
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	論 教 博 第 12 号
学位授与の日付	昭 和 46 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	比較教育学研究序説

論文調査委員 (主 査)
教 授 相 良 惟 一 教 授 篠 原 陽 二 教 授 前 田 博

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、標題に見られるように、比較教育学の研究に関するものであって、全体は三部よりなり、第一部は研究自体について論じたものであり、第二部、第三部は事例研究に関するものである。

まず、第一部の第一章においては、比較教育学とは何かということについて述べ、次に第二章は比較操作過程というテーマを掲げて、比較教育学の内的構造および規準概念ということをあげて説いている。さらに、第三章においては、比較教育学の役割、教育計画の作成、マルクス主義的比較教育学のそれぞれについての所論が見られる。第四章、第五章は、研究の視点として、哲学的アプローチその他種々のアプローチについて述べたのち、世界的視点について述べている。

次に、第二部においては、教師の当面する諸問題という標題を掲げ、集団としての教師、教師の社会的地位、教師養成の諸問題の三つのテーマについて詳論している。これらは、いずれもいわゆる教師論といわれるものである。

第三部は、八章よりなり、「比較教育学における巨視的アプローチとしてのトインビー史観について」ほか七つのテーマにつて述べている。この第三部は、執筆者によれば、主として第一部においてあげた比較可能の問題事項の中のいくつかにつき、比較教育学的考察を試みたものである。

第一部は全体の主論をなすものであって、比較教育学とは何か、とくにそこにある比較とは何かということなどにつき詳論し、解明につとめている。すなわち、比較教育学あるいは比較とは何かについては、ジュリアン、サドラー、キヤンデル、ハンス、シュナイダー、ロツセロ、カザミヤスなど、過去ならびに現在の世界各国における比較教育学者のそれぞれの見解を紹介しつつ、それについて批判を試みている。なお、比較教育学の課題として、それは規範科学ではないという視点に立ち、比較教育学の役割に論及し、とくに教育計画の作成に関する寄与ということについて論じている。また、マルクス主義的比較教育学の問題につき、ソ連および東独における比較教育学を紹介し、それに関する見解を述べている。執筆者がとくに重点をおいているのは、比較教育学の研究の視点であり、そこでは、哲学的アプローチ、歴史的アプ

ローチ、社会学的アプローチのそれぞれについて論じ、最後に、世界的視点からのアプローチについて論じ、その展開として、時間的・空間的に世界を台座として教育事象を展望把握するという視点に立つべきことを主張している。

論文審査の結果の要旨

執筆者は、本論文を「比較教育学研究序説」と題しているが、それは第一部、第二部、第三部よりなり、全体としていちおう完結している。

主論であるところの第一部において、執筆者は比較教育学とは何か、そこにいう比較とはどのようなものかなどの根本的問題について論じている。その際、比較教育学を提唱した多くの学者の所論について、単なる紹介にとどまらず、それらの人々の所説について論評を行ない、また、マルクス主義的比較教育学の紹介および批判などを行なっていることは、評価されるべきである。

なお、執筆者は、比較教育学の課題に関し比較教育学については、自国ならびに世界の教育の改善に資する教育政策ないしは教育計画の作成への諸資料を提供するというのがしばしば起こりうるが、これは比較教育学の本来の意義ではないと主張している。なおまた、比較教育学の微視的な社会学的機能分析よりも、高次の巨視的総合把握の立場に立つことの有意義なことを強調しているが、その具体的展開は今後にまつとはいえ、執筆者の一つの知見として評価されるべきであろう。

執筆者がとくに重点をおいて論じているのは、比較教育学の研究のアプローチのし方についてであり、それに関しては、時間的、空間的に世界を台座として教育事象を展望把握することをもって、比較教育学研究の視点とするという結論に到達している。これは、執筆者の比較教育学研究の立場を表明するものであって、一つの新しいいき方として評価されるべきである。

第二部、第三部は第一部における主張の具体的展開であって、いわゆる事例研究と称すべきものであり、その所論はおうむね妥当であると考えられる。

これを要するに、本論文は比較教育学の根本問題に関し、独自の視点に立って論述したものであり、今後比較教育学の進展に資すること多大なるものと認められる。

よって、本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。